



『諫早菖蒲日記』

野呂邦暢

野呂邦暢は諫早高校の卒業で、『草のつるぎ』で第七十回芥川賞を受賞した。四十二歳の若さで急逝するまで、諫早に暮らし、諫早を愛し、諫早を舞台にした小説を数多く輩出した。

諫早市の荒川邸に住む氏が偶然目にした古文書がきっかけとなって書かれた『諫早菖蒲日記』は、「諫早藩士の誓紙の血判の痕に鮮やかさを甦らせるために」と、氏が渾身の思いを込めて綴った作品である。

文学碑には、その冒頭の一節が刻まれている。

まっさきに現れたのは黄色である。

黄色の次に柿色がその次に茶色が一定のへだたりをおいて続く。

堤防の上に五つの点がならんだ。

毎年五月の最終日曜日にはこの碑の前で「菖蒲忌」が営まれている。没後三十年に当たる平成二十二年は、五月三十日（日）に出版祝賀会と併せて開催された。